風をよむ

No.26

1992.9.25

定価100円

編集：「風をよむ」編集委員会

発行：共産主義者同盟首都圏委員会

国際主義的人民連帯の運動を強めよう

アジア―環太平洋政治・経済圏の形成に向かう日本帝国主義に抗して

自衛隊のカンボジア派兵がついに現実のものとなろうとしている。これに対して「〈フォーラム〉海外派兵を許すな！」をはじめとして多くの人々による反対運動が進められている。他方、一〇月天皇訪中が政府によって決定された。これに対しては「天皇訪中に反対する共同行動」の結成が準備されている。こうした様々の取り組みに職場、地域から可能な限りの結集を行おう。それとともに日本と世界の現代史を画する時代の転換点に立ち会う中で、資本の運動と帝国主義に抗し、共産主義運動を進めるために、数多くの問題が新しい発想と方法で考察されなければならない。紙面の制約から、問題項目の提起に止まるが、重要と思われる点をあげておきたい。

PKO・カンボジア派兵をめぐって

―「国際貢献」という言説の戦略

すでに多くの人々によって「国際貢献」という言葉がある種のマジック・ワードとして働いていることが指摘されている。政府・自民党に象徴される支配的イデオロギーにおいては、中曽根政権当時の「国際国家」、小沢調査会における「国際的安全保障」などとともに一連の政治的位置付けが与えられている。他方、これに対する根底的な批判はどのように行われるべきか？問題はこれらの言説の共通項に「日本国家」が位置していることにあり、同時にそれが現実政治にとって唯一の選択であるかのように幻想されていることにある。そんな政治の現実性などはクソクラエであり、日本国家を媒介しない政治のチャネルは諸個人の可能性の個数だけあることをハッキリさせることが決定的な私達の政治のポイントである。これなしには社会党・護憲勢力などの遺産を生かすことはできないだろう。

天皇訪中をめぐって

―帝国主義的世界支配秩序の再編と日本民族主義政治の末路

エリツィン来日の中止は、ロシア政治の混迷を示すとともにその裏側でわが国の支配階級の国際的政治ヴィジョンの不在と二国間外交の貧困を示した。この政治の不在と貧困のうえに天皇訪中は位置している。これによる天皇元首化が進められなければならない理由は、長年の戦後政治の慣習から社会経済の自然性に拝跪することが政治の現実性であると取り違えた政治家の倒錯した観念の中だけにある。日本帝国主義は自らの求めるところにしたがって一層強くアジア・太平洋の政治経済圏の形成に縛り付けられ、破産と没落の道を急ぐことになるだろう。それは現状の市民社会（支配的民族社会）―国民国家（天皇主義的統合国家）の近代的政治社会システムのありかたを前提としてその欲望に従うことを政治の基準とする限り、避けることはできない。

国境を越える人民連帯運動のために

「個人的なことは政治的なことである」というフェミニズムの指摘は、それを越えた今日の我々の政治を考察するうえでの重要なポイントである。職場から、地域から、経済、政治、文化のあらゆる領域から、要するに人間の営む生活の総ての側面から無数の運動と戦線が形成されることが可能である。資本の運動と、帝国主義に抗して、その近代的政治社会システムからの分離と結合とを進めることが共産主義運動の実態をなす。階級闘争の見地からすればその過程は同時に階級形成でもある。そこに我々の政治と組織の根拠を求める活動をいまここから始めよう。それはこの社会に住む私達のいま、ここ、を発見することでもある。だがそれなしには国際主義的人民連帯は成り立たない。

畑中文治

MR研究会第二回総会のご案内

日　時：10月24日（土）　午後2時～3時

会　場：大向区民会館第2会議室

（渋谷駅下車7分）

［引き続き同会場で下記の通り公開フォーラムを開催いたします。1992年度前期統一テーマ「地域運動と政治」（予定）］

第一回公開フォーラム

「反システム運動と地域運動

―新しい社会運動の視点から」

日　時：10月24日（土）　午後3時～6時

会　場：大向区民会館第2会議室

講　師：星野　智さん（中大教員）

92参院選結果について

保守による中央―地方の疑似選択に抗し、地域に政党の創出を

制が勝利を収め、PKO法はそれなりに信任されてしまったといえるだろう。このように書くといろいろ反論もあるだろうが、投票に行った人の過半数は濃淡はあれPKO法に賛成してしまったという事実から運動も再構築すべきだろう。

今回の選挙で最も注目すべきことは、ほとんど争点を欠いた既成政党の動向より、むしろ投票率が50・72%と史上最低だったこと、さらに自社公共民の五政党の絶対得票率が37・7%だったのに対し、それ以外のいわゆるミニ政党が10%を越えたことである。さらに日本新党が政策一つをとってもあいまいであるにもかかわらず、比例区得票率8・1%で共・民を上回り票をのばしたのは国会での四党の談合政治や、中央集権的な官僚システムへの反発を吸収したもので、争点が保守―革新から中央―地方へと移りつつあることの表れといえよう。逆にこうした流れを読めず、もう一つの中央集権的な巨大利権システムである連合にのった「連合の会」の惨敗も当然であろう。

我々は、この参院選について比例区の萱野さん（社会党）、東京―内田さん、沖縄―島袋さんを特に強く支持してきた。比例区では社会党の不調で今一つ（11位）届かなかった。前回の堀さん（16位―当選）の場合もそうだが、この政党の差別問題に対する利用主義的態度については

とことん批判の必要がある。一方沖縄の島袋さんは劣勢をつたえられる中三〇〇票の僅差で自民党を押し切り、当選した。沖縄をPKO中継基地にするという動きが浮上することで、明確にPKO法と、社大党の党籍を離れずに「復帰」20年の沖縄の今後が争点になったなかでの勝利であること、また六月の県議選でのニューウェーブの躍進とも重なり、唯一の地域政党であり、また沖縄の独自の政党である社大党が国会の場に登場する意義は大きい。

東京では内田さんが31万票を獲得、当選には至らなかったが、共産党の上田票とあわせ、約25%の人が明確にPKO法に反対したことになる。内田選挙のポイントはわれわれからすれば二つあった。一つは連合―社会党のしめつけに対し、どこまで分岐を鮮明にできるのか、もう一つは前回の「原発いらない人々」での選挙を始めとしてさまざまな社会運動、地域運動とどのように結びつくことができるのかであった。前者については、結局森田が当選したとたん、PKO賛成―民社党と会派ということで、処分騒ぎもうやむやにおわってしまいそうだ。あれだけ牛歩だと騒いだ割には、多くの議員の態度はあいまいで「左派」にも組織的、政策的展望がないことがはっきりした。牛歩は、公労協のスト権ストと同じ位置を持つ可能性も強い。後者については、時間がなかったことなどで目に見えるような形での動きは作れなかった。さまざまなイシューの人達との「オルタナティブ・リスト」の作成にいたるような活動が今後必要だろう。

以上選挙結果を概観してきたが、総じていえば小沢―市川の自公体制がカネと腕力、不況下での安定指向などによって勝ったが、そのよってたつ基盤、つまり政党システム、それと一体となった中央集権的官僚システムの綻びが見え始めた選挙といえよう。こうした中で保守の側の従来の保革に代わる、中央対地方という疑似選択がこの間の首長選挙以来定着しつつある。日本新党がそれであり、大前研一や出雲市長岩国などをとりこみつつ進む可能性があるこうした新たな保守主義に対抗しつつ、地域政治、地域政党の展望が問われてくるであろう。社大党の当選はその可能性を切り拓くものと言えよう。

大村　章彦

反PKO闘争から見えてきたもの

集会からムスケルのはざまで……呑み屋で天野恵一さんにきく

〈議面闘争をどうみるか〉

―― 最初に議面闘争についての感想を聞かせて下さい。私自身について言えば、とても情けない気持ちであったわけです。

天野　今回の反PKO闘争については、昨年の「平和協力法」反対運動以来の前史があるわけです。その経過からすれば法案なんだから議会の中で阻止したい。そう考えれば「憲法を活かす会」のみが国会内への通路であったというのは理由のあることだと思う。そこに日市連や私達反派兵フォーラムの人々が結集していった。だから僕達は大きな矛盾を抱えてかかわったことになる。

議員の面前で大衆行動をやることが、何人かの議員の人間的側面に訴える、こういうのはワリと新しい事柄だと思う。それが社会党執行部の思惑をこえていった。「護憲」イデオロギーそのものは一種の「オフダ」に過ぎなかったが、行動によって議員の個々をつき動かし、強力な「牛歩」を引き出していった。こういうことでようやく初めてPKOが社会的争点になった。それまではPTAもPKOも区別がつかない状態であったのではないか。

そうした状況に従って、議会運営そのものも次第にメチャクチャになって行くし、それと対応してニュースをとりあえずつくりたい。これを基礎にして、一つは一一月一四、一五日に予定している反派兵フォーラムに集約される一連のイベントを計画しています。もう一つは先程言った「新しいエネルギー」をくみ取りながら、旧来の運動枠組を組み替え、作り替えて、派兵阻止行動のための大きなネットワークを形成することです。

〈どういう政治が問われているか？〉

―― そこでまた運動の在り方、進め方にもどるのですが、天野さんは「大衆運動の原則」ということにこだわり続けてこられたように私達には見えてきました。

天野　まず、既成の観念にとらわれず現実の運動のうみだす、明るい行動ラジカリズムに従うということではないでしょうか。従来の様々なイデオロギー類型の崩壊の中で、そうした歴史とは切れた、おばちゃんとか、学生、予備校生たちが登場してきている。確かに玉石混交で、変な所もあるけど、意味付けは後からでもできるものです。そこにあったのはイデオロギーではない。新左翼マルクス主義と、内ゲバの恐怖という二つの既成の呪縛から解放された、具体的な政治目標に向けた明るい行動ラジカリズムとでもいうべきものだったと思います。プロレタリア物神崇拝もないし、労組依存もない。唯我独尊的なところもあるが、自立、自発の傾向が強い。エゴイズムやどうしようもない主観主義になったりするけれど、否定しがたいものがある。

また多数派を目指す運動という、ある種の信仰もない。少数派だからホントのことが言える。それをどう広げるのか？色々な運動の中からそうした固有の、控え目でいてなおかつマジメな発想がでてきた。そういうことが色々なテーマの運動の場で自明のことになってきていると思う。例えば前に最首さんが障害者解放運動というのは永遠に多数派になれない、なってしまったらおしまいだって言うんだ。少数派のまんまで存在できて行けるような力を体現していかなくてはならないと。そういう問題というのは随所にある。だから全世界をまとめる多数派で単一の階級とか党という話はもう終わった。しかし、バラバラで良いという訳ではないから、それらの運動をお互いにどう結び付けるか？ここに政治の問題がある。それは今までの党の政治とは違うと思う。違う運動と言葉にして行かなければならない。少数がとりあえず少数としてしか存在しない現実がある。それを無理矢理イデオロギーとか組織とかで大きくくろうとする発想のツケが全部回ってきたというのが、この間の運動状況ではないか。少数が少数であることをまず承認して、それをつなぐことからしかまともな運動は始まらない。国会を巡る運動に反応して、その世代、その運動の経験者はそれぞれみんな、六〇年安保とか、七〇年安保とかを想起しているわけよ。でも同じことはできない。もう全体が全体として大きく動くなんていうことはないわけ。総評とかもなくなったしね。それは決して悪いことばかりではない。そういう状況で何が生み出せるかが大事なわけ。そのための政治や運動は逆にとても大変なわけ。少数のエライさんがいて号令をかければ済む時代ではなくなった。ものすごくたくさんの運動、グループ、個人の意志がつなげられなければならないし、またそれをやろうという人々がぶあつい層として成立していなければならない。

―― 今日は本当にありがとうございました。

（このインタビューは七月四日に行ったものです。公表が遅れたことを読者の皆さんと天野さんに深くお詫びします。）